（『国語学』173集　1993・6・30）

《短　信》

契沖の五種言説と『弁顕密二教論』

井野口　孝

『萬葉代匠記』初稿本惣釈に、契沖の言語観を明確に示したと思われる次のような一節がある。

(1)易繫辞云。子曰、書不尽言、〻不尽意。然則聖人之意、其不可見乎。子曰、聖人立象以尽意、設卦以尽情偽、繫辞以尽其言、変而通之以尽利、鼓之舞之以尽神。この中に書不尽言、〻不尽意といふは、釈摩訶衍論の五種言説の中の、相と夢と妄執と無始との、四種の言説の真理に契当せさるかことし。聖人立象といふより下は、第五の如義言説の能真理を説かことし。此意を得さるもの、内典外典ともに至極にいたりては、言語を離たりとのみおもへるは、をの〳〵その奥義をきはめさるなり。和哥もまたこれに准すへし。よろつの奥義は誰かはきはむる人あらん。此理ありと信して、いつはりをすてゝ、心のをよふ所まことにつかは、神明もこれをうけたまふへし（岩波版『全集』第一巻216頁）

吉川幸次郎『読書の学』（筑摩書房刊。昭和50年。293頁）は、この一節に注目し、「儒仏の『奥義』、歌の『奥義』、みな言語によってのみ顕現されるのであり、言語を離れたところに、『奥義』はあり得ない」ことを契沖が謙虚に語ったものであると指摘するが、私が注意を喚起したいのは、契沖が『釈摩訶衍論』（龍樹造・筏提摩多訳）にみえる「五種言説（ごんぜつ）」に言及し、その中の「如義言説」こそ「能」く言語の「真理を説」くと力説していることである。というのも、この「如義言説」のことが、『和字正濫鈔』巻一（序文）にも見られるからである。

金剛語菩薩を無言大菩薩といふは、言の実相に達すれは、言すなはち無言なり。是を釈摩訶衍論に、五種の言説を明す中に、如義言説といへり。たとへは、鏡の空なれは、まとかなる形、白き色あれと、万像をうつすさはりなきかことし（『全集』第十巻114頁）。

このような『釈摩訶衍論』に引かれる「如義言説」へのゆるぎない信頼は、契沖の内面において、どのようにして形成されたのであろうか。

それを解く手掛りは、「初稿本」に見える次の箇所であろう。

(2)顕教の中の、経論にも、如義言説は、無為の真理にかなふよしを説れたる事、日月の明なるかことくなれとも、言断心滅に封著して、柱に膠せる輩、頭をめくらす事あたはす。二教論の引証の文ともをみるへし。守護国界主陀羅尼経（般若三蔵訳）云（『全集』第一巻215頁）

この箇所は、「密教」（真言宗）と対比される「顕教」の徒が「言断心滅（ごんだんしんめつ）」にとらわれ、「如義言説」に目覚めない、その融通のなさを非難したものである。そして『二教論』への注意を促す。この『二教論』とは、空海の『弁顕密二教論』（弘仁六年〈815〉頃成立）にほかならない。

「言断心滅」とは、言葉の境界を離れ、心の認識作用を滅した境地。言葉で表現することも、考えることも（心に思うことも）できない境地をいう。しかも、この語は『弁顕密二教論』に見える語でもある。その用例を示そう。

・故、『地論』『釈論』、称二其離一レ機根一、『唯識』『中観』歎二言断心滅一（『弘法大師全集』第一輯474頁）

・喩曰、顕教所談言断心滅之境者、所謂、法身毘盧遮那内証智境界也（同右496頁）

このように、契沖は「言断心滅」という語を『弁顕密二教論』から学んだ。[注1]とするならば、『釈摩訶衍論』の「五種言説」も『弁顕密二教論』に見える次の一節をふまえたものではなかったか。

龍樹『釈大衍論』云「言説有二五種一（中略）論曰、言説有レ五。云何為レ五。一者相言説、二者夢言説、三者妄執言説、四者無始言説、五者如義言説。『楞伽契経』中作二如レ是説一。大恵、相言説者、所謂、執二着色等諸相一而生。大恵、夢言説者、念二本受用虚妄境界一、依二境界一夢。覚已知下依二虚妄境界一不実上而生。大恵、執着言説者、念二本所聞所作業一而生。大恵、無始言説者、従二無始一来執二着戯論一、煩悩種子薫習而生。（中略）如義語者、実空不空。空実不実。離二於二相一、中間不レ中、不中之法、離二於三相一。不レ見二処所一、如如如説故。

如レ是五中、前四言説、虚妄説故、不レ能レ談レ真。後一言説、如実説故、得レ談二真理一。馬鳴菩薩拠二前四一故、作二如レ是説一離言説相」（『弘法大師全集』489～490頁）

この一節に関して、『弁顕密二教論』の注釈書の一つである『二教論杲宝鈔』（寛文12年版）は、

是釈論第二真如門中躰真如レ説段レ文也（二教論上口筆巻之十・5オ）

と述べ、「相言説」を法相宗に、「夢言説」を三論宗に、「執着言説」を天台宗に、「無始言説」を華厳宗にそれぞれ擬する説を掲げたりしている（巻之十・9オ～10オ）。契沖が実際に繙いた『弁顕密二教論』の本文・注釈書がどのようなものであったか、今のところ特定することはできないが、『二教論杲宝鈔』などは契沖の目に触れたかもしれない。

もちろん、契沖は同じく空海の『声字実相義』に「相・夢・妄・無始」の四つの言説を「妄語」と呼び、「如義言説」を「真言」と呼んでいることも十分承知していたに違いない。

若知二実義一、則名二真言一、不レ知二根源一名二妄語一。妄語、則長夜受レ苦、真言、則抜レ苦与レ楽。譬如二薬毒迷悟損益不同一。

問曰。龍猛所説五種言説、今所説二種言説、如何相摂。答。相・夢・妄・無始者、属レ妄摂、如義、則属二真実一摂（『弘法大師全集』第一輯526頁）

ただ、「初稿本」の(2)の用例を見る限り、契沖の「五種言説」なかんずく「如義言説」の主張には、空海の『弁顕密二教論』が強く意識されていたであろう。

かつて、私は、「契沖の漢学」を考察する場合、空海の著作およびその注釈書群との関連を視野に入れる必要を強調したことがある。[注2]契沖の言語学説は、すでに築島裕「契沖の語学と仏書」（岩波書店『契沖研究』所収。一九八四年）が指摘するように、密教的色彩を帯びる。契沖の言語学説に関する考察も、まず空海との関連を考慮すべきであろう。[注3]（平成四年十一月十日）

注1　「言断心滅」の語は、空海の『法華経開題』『法華経密号』にもみえる。

注2　・「『萬葉代匠記』所引の漢籍をめぐって」（『萬葉』第113号。昭和58年5月）・「『萬葉代匠記』と『性霊集抄』――「代匠」との関連において――」（『萬葉』第126号。昭和62年7月）

注3　例えば「六合釈」は『声字実相義』にみえる。

――愛知大学助教授――

（平成四年十一月十二日　受理）